富士の民話 あれこれ

慶昌院の幽霊

中里一丁目に慶昌院（けいしょういん）というお寺があります。このお寺は、弘仁十年（八百十九年）に弘法大師が建て、当時は天念寺と呼ばれていました。

今回は、慶昌院の先代（第三十代）住職である磯田英雄さんから、慶昌院に伝わる幽霊のお話を伺いました。

▷成田三郎慶昌の墓。「空忍院殿天念慶昌居士（くうにんいんでんてんねんけいしょうこじ）」と刻んであります。

江戸時代初めのころ、各地をめぐっていた駿府の存鯨和尚（そんげいおしょう）は、荒れ果てていた天念寺を見て、その理由を村人に尋ねました。

村人は、「この寺には幽霊が出るので、だれも寄りつきません。どうか幽霊を退治してください」と言いました。

その晩、和尚はお堂で座禅を組んで、幽霊が出るのを待ちました。すると、草木も眠る丑（うし）三つどき（真夜中）、怪しい影が和尚に近づきました。

「わしは、存鯨という坊主だが、そこにいるのはだれか」と静かに尋ねました。怪しい影は、「あなたは、迷えるものを救い、成仏できるように導いてくださるか」と言いました。和尚は、「しかり」と答えました。

鬼の姿をした怪しい影は、たちまち人の姿になって言いました。「私は、源頼朝（よりとも）公の家来で、成田三郎慶昌という者です。私の兄の曽我兄弟は、親のかたきを討ったのですが、殺されました。私も首をはねられるに違いないと思い、切腹したのです。死骸（しがい）は松の根元に埋められ、祭られましたが、戦国の世に寺は荒れてしまいました。どうぞ、私が成仏できるよう寺を再興してください」

和尚が寺の再建を約束すると、成田三郎慶昌の姿は消えました。村人は、改めて丁寧に葬り、供養したということです。

存鯨和尚（慶昌院初代住職）は幽霊に対し、大きな声で一喝して「悟り」を開かせたとも言われています。

幽霊とは、人々の迷いの象徴。「悟り」とは、迷いを吹っ切ること。そして、仏は、迷っているものに「悟り」を開かせてくれます。

だから、存鯨和尚は、幽霊としてあらわれた成田三郎慶昌の迷いを吹き飛ばすため、大きな声で一喝したのかもしれませんね。

磯田英雄さん（中里一丁目）

こちら編集室

妻が3ヵ月ぐらい前から美顔エステに通い始めました。化粧かぶれに悩んでいたとき、職場の上司に化粧品を勧められ、ついでにエステも試した結果、いずれも本人の肌に合っていたからです。

化粧一つで女は変わると言います。しかし、内面の美しさこそ本当の美しさだと思います。

そして、自然の流れに逆らわず、きれいに年をとってほしいと望みます。

映画「永遠（とわ）に美しく…」の主人公のようには、ならないように。

人口 232,935人
男 116,183人 女 116,752人
世帯 73,394世帯 （6月1日現在）
発行・編集 富士市総務部広報広聴課
富士市永田町1-100 ☎51－0123

広報ふじは再生紙を使用しています